

紙つづて

毎年一月のこの時期、卒業論文の最後の仕上げにかかる四年生の熱気で、大学内はどこか緊張感が漂つ。ゼミに入り研究調査を続け、二年を費やし完成する、大学生生活の総決算である。レポートをまとめたものでなく、立派な感想文でなく、主観に拘泥せず骨子を組み立て、思考のプロセスを明示し、論証し、結論へと至る。ところが、これがことのほか難しい。

テーマは文化政策を歴史的見地から検証するパターンが多いように思うが、テーマ決定から一年を過ぎた頃、学生たちははたと立ち止まる。このまま進めてよいものか、はたして自分に何が言えるのだろうか。

卒論とマキアヴェッリ

武田 好

そんなとき、マキアヴェッリの言葉を引いて学生たちを励ます。今からおよそ五百年前のフィレンツェ国で、彼が後輩の外交官に向けて送った言葉である。

マキアヴェッリは言つ。外交使節が上司に送る報告書には二種類あって、現在進行中の事柄、終了して結果が出た事柄、これからなすべき事柄があると。そして、起きてしまった事柄を知るのはたやすいが、残りの二つは困難であると。

学生たちよ、あなたが今なげそのテーマをとりあげる必要があるのか、そのテーマに関わる先行研究はどうかであるのかについてはすでに述べた。二つは乗り越えたのだから、あとはそこから導かれる結論を、優れた判断力と洞察力で書ききるのだと。

(静岡文化芸術大教授)

2020.1.25

2020.1.25

中日新聞(夕刊) P.1